
うたかたの記憶

トモコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うたかたの記憶

【Nコード】

N8546D

【作者名】

トモコ

【あらすじ】

断片的なファンタジー小説様々な記憶が飛び交っていくなかで出会った人と人との繋がりを描いている

わたしは、もう死んでしまいたかった。だけど今死んでも誰も泣いてくれないの止めた。悲しいという感情すらもう無くなってしまった。不幸な出来事に対する感覚が消えてしまった。誰も私を理解してくれない。誰一人。誰一人。誰一人。

あれはいつ頃の話だっただろうか。私の所に一人の老婆が訪ねてきた。暑い夏の日の夕方、蝸がヒトヒトと鳴いている墨色の日だった。

老婆は私の顔をしげしげと眺め、ため息をついた後しわがれた声でこう言った。

「帰って来たのかえ」。

年の頃は幾つくらいなのだろうか。ごま塩の鬢を後ろで結わえ何枚もの継ぎをあてた檜皮色の着物を纏ったその老婆は、まるで幾千年もの時を超えて私の前に現れたかのような佇まいだった。そして私は、ひどく懐かしいような、それでいて何か恐ろしい物を見るかのような感覚で彼女の顔を覗き込んだ。

「この人は私だ。」

私は、直感的にそう感じた。そして彼女にそんな私の気持ちを悟られてはいけないような気がした。悟られた瞬間に私も彼女もここに居られなくなるかのような根拠のない不安が身をよぎったのだ。

彼女と私は縁側で話していた。なぜ玄関ではなくて縁側だったのか、彼女はどこから訪ねてきたのか、思い出そうとしてもなぜか思い出せない。

ただ、縁側から覗いた百日紅の枝の間を黒いアゲハチョウがゆらゆらと舞っていたのを覚えている。

私は老婆の肩越しに、それをボンヤリと眺めていた。蝸がヒトヒトと鳴いていた。

遠い町に来て、夕方になってもまだ家が見えてこないと妙に不安

で寂しげな気持ちになったものだ。子供の頃の話である。両親も弟も一緒に車に乗っているのに、もう二度と両親や弟に会えなくなるのではないか、もう二度と家には帰れないのではなからうか、なぜかいつもそんな不安にかられていた。見慣れた家の灯りが見えてくるとやっと安心して眠りについた。家に着いたときはいつも眠っていたので両親は私はずっと眠っていたと思っていただろう。

実は大人になってからもこの癖は直っていない。夕暮れ時になると、とても寂しくなって家に帰りたくなる。

そしてそんな時、必ず脳裏によぎる家が今自分が住んでいる家ではなく遠い田舎の古びた茅葺き屋根の家。多分、あの老婆の家だった。

時々、自分が何千年いや、何億年という時を生きてきたような奇妙な感覚に襲われることがある

遠い星が爆発した 私は、そこにいた

本当に全てが消えて無くなるなんて思いもしなかった
だけど、全てはなくなった

その後、何億年の時を私は、鉱物として生きた

生きた のかどうか、ただただ、宇宙空間に漂い続けた

友人もなく 家族もなく 動くこともなく

喋ることもなく 夢もなく 希望もなく

ただただ、全てを眺めて過ごした

何億年も 何億年も

ずっと眺めていた蒼い惑星があつた

美しかった

どんな生き物があそこに住んでいるのだろうか

あの星に行きたい あの星に行きたい あの星で生きたい
ときどきあのころの夢を見る

蒼い星の記憶

ずっと焦がれ続けた蒼い惑星

が、今に戻ってくる

二十代の頃、私は、空手を習っていた

なぜ、習いたくなつたのかよく分からない。ただ、熱心に稽古に励んでいた

体を動かす度に、「こうではない。私が知っている動きはこうではない」という不可解なジレンマに陥っていた

多分、古代中国

私は、武術を使う男だった

恐らく身分の高い生まれだったその男は、国を滅ぼされ武術家として生きていた

愛する女がいた

女も又、国を滅ぼされていた

二人の間に子供があつた 男の子だった

ある時、私は王の命で旅に出た

在るはずの無いものを探し続ける旅

砂漠で見た日食をよく覚えている

兵士達が皆怯えていた

蒼い昼間

結局、帰ることは無いままだった

妻も息子も失ってしまったまた感覚が飛ぶ

私は、戦っている 何かを守る為に

流れる鮮血

もう、誰も殺したくない

牢に幽閉されている私

怖れ 不安 傷み 哀しみ 絶望 憎しみ

沢山の人間に尋問される私

どうしていいのか分からない私

裏切られる感覚

殺される私

泣き叫ぶ人の声

表情のない処刑役人の顔

次は自分の考えで 全て自分の考えで生きていこうと思った記憶
私が幸せになれなかった事で、故郷の父や母を悲しませただろう
という苦しみの記憶

更に飛ぶ感覚

いつの時代のことか

私は廓の太夫だった

夜ごと繰り広げられる宴 旦那さんがたの立派な草履

もとは、お武家さんの家の娘だったその人は、お家が潰され廓に売
られた

廓には、廓の誇りがあった

書生さんが、住み込みで庭掃除なんぞの仕事をしてはった

なんで、廓なんぞで働いてたのか 分からない帝大の学生さんだっ
たよく、

話を聞いてくれる人だった

私は、お月さんに恋するように その人に恋をしていた

小説を書いてはった

どうなったんやろねえ あのお人

小説家にならはったんやろか

実家が企業家やけど、ご両親とうまくいかんのやて言うてはった

恐らく私の代わりに殺された

遠い記憶 遠い記憶

愛することを怖れる私

幸せを手に入れる事を恐怖する私

遠い昔の話

砂埃が舞う記憶ご商売 継がはったんやろうかねえ

うち 労咳で死んでもうたから、後のことはよう知らんのですわ
幸せになつてはつたらええんやけど

夢を見るのは、こりごりや

お月さん眺めとつたら十分や

ある時、私は歌姫だった

長いドレス

芸術家達の集い

音楽隊の奏でるメロデー

たくさんの人達の拍手 笑い声

退廃的で、嘆美な空気

終わりは、どんなだったんだろう

多分戦争が始まった

とめどなく、現れては消えていく泡沫のような記憶

あの老婆が、どこから来てどこに行ったのかわからない
多分、私と私が出会った瞬間だったんだ

おもてに出るとすっかり夜が更けて月が出ていた

柿の木の枝葉をくつきりと月の光が浮き彫りにしていた
ちよろちよると流れる小川の音

こうこうと照る月の光で、映された私の顔

小川の水面に映った私の顔は、あの老婆のものだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8546d/>

うたかたの記憶

2010年11月9日06時55分発行